

ああ子育て戦争 ●小説 親子事情

一九八〇年十二月十日初版発行

一九八一年三月十五日四版発行

定価 一一〇〇円

著者 矢崎 藍 © Ai Yazaki, 1980

発行者 小林泰輔

発行所 学陽書房

東京都千代田区富士見一七―五

郵便番号一〇二振替東京七―八四二四〇

電話〇三(二六)一一(本社)

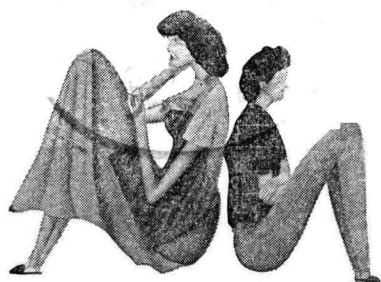
〇三(二六四)八三三(編集)

印刷・文弘社／製本・東京美術紙工

乱丁・落丁はお取り替えます。

小説・親子事情

ああ子育て戦争



矢崎 藍

もくじ／ああ子育て戦争

1

第1話＊青い三輪車 1

2

第2話＊何かひとつ一番を 24

第3話＊いじめられっ子の富士山 42

第4話＊算数嫌い 63

第5話＊すずかけ爆弾 79

3

第6話＊プール当番始末記 100

第7話＊担任追い出し作戦 113

第8話＊出る杭 127

4

第9話 * 高校受験序曲 140

第10話 * 頭がいい 156

第11話 * ポルノと煙草と登校拒否 177

5

第12話 * ああ子育て戦争 204

あとがき 229

装幀 アトリエ And-Run
イラスト 鄭 仲明

ああ子育て戦争 ● 小説 親子事情

第1話 * 青い三輪車

1

団地のガラス窓は四角く区切られた青一色の秋空です。私は寝坊している長男朗の朝飯だけをテーブルに残して、台所の片付けをしていました。七年間も続けたパート勤めを体をこわしてやめ、再び得た専業主婦の穏かな朝です。窓の下の方で小さい子の騒ぐ声に耳を傾けていると、背後のドアがガタツとあきました。朗です。もう十時半。大学の授業をまた何時間かさぼったのでしょうか。寝起きが悪いのでむっとした顔でテーブルにつくと、目の前のテレビにスイッチを入れます。

私は台所の付属機械みたいなもので、その姿を見ればパンをトースターに入れ、ソーセージを炒めはじめます。朗は私の手の先しか見ません。「コーヒー」「さとう」とか必要な単語だけをにこりともせずにあります。テレビを見て声をたてて笑います。しだいに機嫌がよくなり、「食った」と言うや顔を洗いに出てゆき、やがて洗面所からローションを顔につけながらコマーシャルソングを歌って出てきました。

そこで、はからずもピタッと視線が合い、彼はにっこり、私はドキリ。果して、
「ね、お母さん、十四万円決心ついた？」

大学生のくせに友だちと三人で車を持とうというのです。中古のキャンピングカーを四十二万円
で格安に譲ってくれる人があるのだそうです。手に入ったら荷物配送のアルバイトに使うなどと言
っています。目的は夏のレジャーに決まっています。私が無言で首を振ると、

「必ず返すよ。じきもとでがとれるんだ」

「お金がないわよ。四月に九十五万円も大学に払ったの忘れたの？」

「大学に入ってから騒いだのはそっちだぜ」

「だって大学ぐらい出なきゃ。あなただって入ってよかったと思ってるでしょ」

「うん、もう就職する気はなくなった」

一時は朗も就職するといつて、四輪の免許証までとったのでした。でも、就職しないという言葉
も心配のたねです。

「朗、先輩の誰とかさんみたいに留年なんてしないでよ」

「ねえ、菅原んちも安田んちもお袋さんが金出してくれたんだよ。なんでうちだけちるのさ。み
つともないよ」

「あなたのお友だちはお金持すぎます。うちはただのサラリーマンでアパート住まいなんですよ。
あなたも見栄をはるのはおやめなさい」

「うるせえ」

朗の顔色がさっと変りました。「頼まねえよ。おれの單車売るからな」

「あの單車はお母さんが買ってあげたのよ」

私は後ずさりしながら言いました。「第一、なかつたら通学に困るわ」

「おれのことを勝手にして何が悪いのさ」

「あなたのものじゃありません」

大声を出しているうちあんまり胸の動悸が激しいので、朝の血圧の薬を飲み忘れたことを思い出
し、私は流しにとんでいきました。

朗がついてきて舌うちをします。

「なんだ。哀れっぽく薬なんぞ飲んでみせやがって」

いつもこんな子というわけではないのです。お金の話になるといけないのです。

小一時間も粘った朗は時計をちらちらと見ると外出の準備を始めました。部屋の戸をお隣さんの
壁にひびくほどの音で閉めて歩き、白いセーターにレザーの上着をきこんで現われると、

「ケチ、ビンボウニン、ミニクイオンナ、イトシシテケツフリヤガッテ」

とわめくと、玄関のたたきに何か叩きつけて出ていきました。とんでいくと一輪ざしの花活けが
破片になっています。拾おうとかがんだとたん、もう一ぺんドアが開いたのにはほんとに驚きまし
た。朗はまだいて、入口いっぱいに立っており、

「お母さん」

と今度は猫なで声です。耳がワーンと鳴りました。私は下駄箱につかりました。

「お母さん」朗の声が降ってきます。

「じたばたすると体に毒だよ。どうせ最後には出すんなら初めから気持よく出す方がいいじゃ
な。お母さんは三輪車も子供自転車もミニサイクルも買ってくれたよね。五段変速も、單車もじゃ
ない。ずっとめんどろみてくれてさ、免許までとらせてくれてさ、車はだめ！ だなんて、そりゃ

ないよ。じゃね。信じてるよん」

ドアがバンと閉まり、軽い足音が何段とびかで階段を下りて遠ざかっていきました。

2

「そりゃないのは私たちですよ」

と私は夕食の時、夫に憤懣をぶちまけました。

「三輪車から車まで親が買うなんて、そんな」

「ゆりかごから墓場までなんじゃないの」

と朗の妹の理恵がくすくす笑って口をはさみました。

夫はテレビを見ながら私の声を聞き流しています。年を追って夫は争いごとをおっくうがるようになりました。だいたいふだんから朗にあまり話をしないのです。朗の方はけるけるとしやべりまくるのですが、夫はほとんど無視する態度をとります。夫は苦学して社会に出た人ですので、朗のようにチャンスを与えられながら勉強しない息子が齒がゆくてたまらないのです。高三のとき、勉強がきらいだから就職したいという朗を、私たちはいっしょうけんめい説得しました。

紆余曲折を経てようやく大学へ行くことを承知した朗は、推薦入学を希望しました。受験勉強なんてまっぴらというわけです。勉強を放棄して大学に入るなんて、夫の考えとして許せるはずはないのに夫は妥協しました。それほどまでに朗を大学に行かせたかったです。私たちは、子供に教育以外何も残せないサラリーマンだからです。それでしぶしぶ払った九十五万円なのに、おかげで朗の方はすっかり「親のために行ってやるよ」という顔になってしまい、そんなら楽しくやろうという方向に展開してしまいました。

夫と朗とのくいちがいは何度も爆発して喧嘩になりましたが、だんだん夫の方が黙ってしまったのです。この家は全員揃うと何となくしきしきした雰囲気です。私と理恵が声をはりあげて笑ったりします。ええ、昔はそうではありませんでした。

テレビにむいて、少し充血した目をしばたいている夫の横顔を盗みみて、私はちょっとおかしくなりました。

新しい三輪車を買ってきて『アキ、アキ、アキラ、こっち向け』なんてカメラを構えていた夫の姿が目についたからです。今でもその時の写真が残っています。社宅にいて、雪柳の花が満開ですから、朗は二歳位でしょう。まっ赤なほっぺたで大きな口をあいて笑っています。ぶくぶくした両手はしっかりと青い三輪車のハンドルを握っています。まだペダルは使えないように、またがって立ったまま歩いているふうです。おしりがおむつでふくらんで、おまけにずり落ちそうという姿です。

あの頃はよかったなという思いがつきあいました。若かったということもあります。小さいけれど庭つきの社宅での一日は、子供と雑用に追われめまぐるしく暮れました。朝雨戸をあけると、あの大株の雪柳が陽光に輝いてまぶしく、夕方はつかれた目にほの白く浮きあがって、優しく咲いていました。つましい結婚生活のスタートでしたが、景気のおよくなりたてのことで、家計は少しずつ楽になります。私たちは自分たちが子供の頃してもらわなかったこと——三輪車やおもちゃを買うことやら遊園地行き、動物園行きなど——に精を出しました。小さい朗を中心にした生活は私たちにとっても新鮮で楽しいものでした。

私の母は遊びに来ると、ケーキをたくさん買って来て、朗が顔や手をべたべたにして食べているのを見ながら、しみじみこう言ったものです。

「子どもに食べさせただけ食べさせてやれる位嬉しいことはないねえ」

戦時中に私たちを育て、辛いりごはんを兄妹に公平なようにおわんですりきって配膳していた母の氣持が、私にもよくわかりました。

私たちは子供が欲しいものを与えることができる幸せな親でした。朗は何かもらうと「アリガト」をしました。ひざと腰をかがめて丁寧におじぎをします。

子供用自転車を買ってやったのは朗が幼稚園に入った年のクリスマスです。その朝、暗いうちから起きてきた朗は、クリスマスツリーのわきに燦然と輝いている自転車を見て、手を叩きました。ぐるりとその周りをまわると、はっと氣づいたふうで窓にとんでゆき、カーテンをひきあげました。わずかに白みがかった空をはるかに見て、

「ああ、やっぱり行っちゃった」

と嘆息するように言いました。

朗の目にはトナカイにひかれる櫓に乗ったサンタクロースの後ろ姿が、小さな点になるまで見えていたでしょう。

朗は（三年おいて生まれた理恵ですが）確かに私たちより幸せでした。それを見るのは親としての幸せでもあります。でも今、その幸せはあの雪柳の花吹雪に包まれて、遠い夢のようです。

3

私たちの子育て時代は、世の中がめまぐるしく変りました。おばあちゃんがたとえ傍にいても、助言が役立つ時代ではなかったと思います。そしてとくに私たち夫婦のように子供がもとと好きな人間にとって、子育てはかえってしんどいものです。

親が単純に物を買って子供を喜ばせるということは、やはりよくありませんでした。幼児の頃、2DKの家の中はおもちゃだらけで、どこか行くたび、誰か来るたびおもちゃが増えました。朗は当然物を大事にせず、おもちゃを遊園地に置いてきたり人にやったりしました。一方でテレビのコーナーにでてくるおもちゃを次々に欲しがります。

よその家でもそうでした。母親のわめく言葉が「勉強しなさい」をのぞけば「片付けなさい」になったのはこの頃からなのです。私の小さいころは片付けるほどの物を持っていませんでした。今の子はちがいます。

朗の入学準備の豪華だったこと。ランドセルに文房具セット、電動鉛筆削りはもらいものです。私たちは新発売のスチールデスクを買ってやりました。ライトも時計も温度計も本棚もついていた。本棚には、一年ごしの分割払いの学習図鑑全十二巻が並びます。回転椅子に座った朗は一城の主で、段ボール箱に二杯もあるおもちゃをそこに並べはじめました。そのうち妹も同じ机を並べ、エレクトーンが入ると、2DKのひとへやや完全に子供の荷物に占領され、私たちは間もなく社宅を出て、この公団アパートの3DKに引越してきたのです。

これはぜいたくなのでしょうか。私には何とも言えません。この祥光寺ニュータウンの、林立するアパート群に住む他の家と比べれば、これは普通でした。

夫は中企業のサラリーマンですし、私も近所の奥さんと内職をしているような経済状態でしたが、子どもにそれ位揃えてやらねば肩身が狭いという方が実情でした。親の方も新しい炊飯器、冷凍冷蔵庫、ジュースミキサー、二台めのテレビと、豊かな消費者の時代へのかけ声にひきずられていました。「みんなが買っているものを買わなきゃ」「人並みでなくっちゃ」という気持はこんな団地に住んでいると、とても強くなるものです。

だから世の中が第一次石油ショックに襲われた時も、あのトイレットペーパー買い占め騒ぎに私もすぐ巻きこまれました。目はしの利く友だちの言葉に従ってうまくやったつもりが、何のことはない、次の一年間押し入れをふさいでなかなか減らないトイレットペーパーの山に、苦い悔恨を味わうことになったのです。

「不景気」の文字が新聞やテレビに出るようになった頃、私たちは自分たちが追いかけている物質的な幸せが、実は表面的で不安定なものだということに、ときおり気づいたような気がします。でも、私の望んでいたのは「せめて人並み」でした。それも、それを自分ではなくわが子に実現しようとしているのです。どこが悪いでしょうか。

そんな私たちに、朗の中学での成績はショックを与えました。一学期の中間テストで朗は三百十人中二百四十一番、期末テストで二百三十八番。つまりほとんどの科目で3を脱落したのです。小学校時代、朗は水泳教室に通っており、体育が4のほか図工と音楽でたまに2をとる他はだいたい3ばかりでした。「少し気が弱いが人なつこくていい子です。中学へ行ったら勉強もがんばろう」と最後の通知表に書いてありました。でも現実には二百番台。よい私立どころか県立の高校にさえ入れるランクではありません。

夫も真剣に心配し、ともかくテレビの視聴時間をへらす効果だけでもいいからと、学習塾へ毎日行かせることにしました。私も塾友たちのお母さんとよく話すようになると、だんだんに事情がわかってきました。

やはり昔とちがうでした。昔も今もまじめな子や頭のいい子は、親が放っておいてもきつと人並み以上の実力を発揮します。ところが朗は並みの子です。昔は並みの子を放っておけば並みの子です。今は他の並みの子が英・数教室、学習塾、英会話塾、通信教育などで力を磨きます。そうす